

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02341

研究課題名（和文）地域博物館における防災教育実践モデルの開発

研究課題名（英文）Development of Practical Models for Disaster Prevention Education in Community Museums

研究代表者

生島 美和 (Ojima, Miwa)

帝京大学・教育学部・准教授

研究者番号：80535196

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では実物資料やそれをめぐる科学知、および過去の経験や伝承による文化的記憶を有する博物館及び博物館的機能が、地域防災をどのように扱っているのか、そうした実践はどのような理論的基盤に支えられるかを明らかにすることを目的とした。理論的基盤として1930年代から郷土博物館論を唱えた棚橋源太郎の防災観に着目し「自然と共に生きる」ことを通じた地域理解があったことを明らかにした。さらに東日本大震災の津波・原発事故の被災地域において、震災遺構や地域博物館を拠点とした語り部活動が、地域防災をめぐり、震災以前からの暮らしや文化を見つめなおし「現在」や「未来」を見つめる地域学習へと展開していることを捉えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、棚橋源太郎の防災観を踏まえて検討により、特に震災後に防災教育を目的として保存・活用されるために整備されてきた震災遺構や文化的ハブとしての機能が求められる博物館は、地域住民による語り部活動の支援や来館者との対話の場の提供を通じて、地域学習を深化する機能が求められた。

こうした地域学習は、震災以前からの自然や地形、暮らしや文化をも統合的に捉えようとしていた。このプロセスは学習者である地域住民の当事者意識を育むとともに、継承や持続可能な地域づくりの資源となる。地域学習の深化は、博物館研究や社会教育学研究のみならず、民俗学、社会学、都市計画などにも結び付くと考える。

研究成果の概要（英文）： This study aimed to clarify how museums and museum functions can handle regional disaster prevention, and what theoretical foundation such practices are supported by. Community museums hold not only real objects and the scientific knowledge but also cultural memories based on past experiences and traditions.

This study focused on the disaster prevention view of Gentaro Tanahashi, who advocated the idea of community museums since the 1930s and clarified that there was a regional understanding through "living with nature." Furthermore, we found to work the storytelling activities based in ruins of the earthquake and museums. They have expanded into community-based learning about the "present" and "future" by looking back at life and culture from before the earthquake in relation to regional disaster prevention.

研究分野：生涯学習・社会教育学

キーワード：防災教育 震災遺構 語り部 地域学習 地域博物館 地域学習

1. 研究開始当初の背景

2018年の研究開始当初は、東日本大震災からの復興における課題や展望、地域防災活動やレジリエンスを高める住民の学びや社会教育に基づくコミュニティ形成への探究へと結実して来ていた。一方で、防災教育の内容・方法への探究も求められ、地域の個別具体的な防災という課題に対して、文化的記憶と共に価値づけられた資料を有し活用する教育機関としての博物館への期待は大きいと捉えた。

一方、博物館側から災害・防災に関する研究は、資料保存や修復およびそれを具 体化する施設間ネットワークに注力されており(『被災地の博物館に聞く 東日本大震災と 歴史・文化資料』国立歴史民俗博物館、吉川弘文館、2012 ほか) 防災に向き合う住民の育成や教育の可能性については、ほとんど着目されていなかった。

おりしも東日本大震災被災地では、博物館のみならず、震災伝承施設や震災遺構など津波や地震の脅威についてリアリティをもって訴えるツールは整備され、ダークツーリズムや他地域からの防災教育・研修の場となっていた。こうした場について、地域住民を含む学習者の継続性と拡張性のある学習の視点、および学習内容や方法、組織運営についての検討が求められると考えた。

2. 研究の目的

本研究では実物資料やそれをめぐる科学知、および過去の経験や伝承による文化的記憶を有する博物館及び博物館的機能が、地域防災をどのように扱っているのか、そうした実践はどのような理論的基盤に支えられるかを明らかにすることを目的とした。

この目的を達成するため、次の2点を具体的課題とした。

(1) 棚橋源太郎の実物教授法・郷土教育論の背景にある防災教育の解明

地域博物館の理論的原点にある郷土博物館論を唱えた棚橋源太郎の理論形成の背景にある棚橋自身の被災経験に基づく防災思想の解明を行う。棚橋は岐阜県師範学校教師を経て東京高等師範学校教諭兼訓導に着任し、博物学・理科教授法研究に立脚しながら欧米留学で学んだ博物館論・実践のわが国への導入を行い、博物館の普及・定着とともにその組織化・制度化に尽力してきた人物である。本研究では、その棚橋が実物資料を通じて地域の在り様を住民が学ぶことの重要性について「科学に基づく災害への備え」という視点から繰り返し主張してきたことに着目する。

(2) 東日本大震災被災地における地域住民の学習活動の展開

東日本大震災の被災地では、大津波や地震の爪痕をできるだけそのまま残そうと震災遺構が整備されてきているが、そうした遺構を拠点に、地域住民が当時の事実を伝え、その反応を受け、そうして語り継ぐ営みが語り部活動として行われている。語り部活動は、震災前から続けられてきた地域探究、対話的な学習方法に基づくものであり、さらに震災語り部として、地域住民のみならず来訪者とも対話することで深化と構造化が図られている。したがって復興・地域づくりに向かおうとする住民の学習活動の展開を捉えながら、その構造や内容、方法と拡張性を明らかにすることで、実物資料の活用を通じた地域学習の実践様態とその支援方策について検討する。

3. 研究の方法

(1)の課題については、棚橋が被災した濃尾大震災・関東大震災の状況に鑑みながら、「防災」をどのように捉え、博物館を通じてどのように伝えようとしていたのか、文献・資料の検討を行った。

(2)の課題については、東日本大震災で津波被害の大きかった宮城県山元町をフィールドとし、特に語り部活動を行ってきている2つの学習グループにインタビュー調査を行い、活動実態について考察した。学習グループのうちのひとつは、山元町歴史民俗資料館を拠点にしながら、地域の民話を採集し、語ることを活動としてきた「やまもと民話の会」である。もう一つは、山元町の震災遺構・中浜小学校を拠点とし、被災経験と防災について語り部活動を行う「やまもと語りへの会」である。

4. 研究成果

(1) 棚橋源太郎の実物教授法・郷土教育論の背景にある防災観の解明

棚橋源太郎は博物学、なかでも直観教授に立脚しながら、博物館の普及・組織化・制度化に尽力した人物である。本研究では、自身が被災した濃尾大震災(1891)および関東大震災(1923)の経験が教育論や博物館論にどのように投影されているかを明らかにした。資料・文献調査から、棚橋の郷土概念については、初等教育において児童が生活の中で経験し、理科・地理・歴史教授の基礎となる概念であること、そして動物・植物・鉱物の関係性ととも、それらと人間との関係性を総体として捉えていた。さらに、そうした郷土についての学習は子どもだけでなく、成人もまた生活や地域振興について学ぶことが必要であり、そのためには不燃性の建物による博物館施設や維持・活用できるような設置主体を求めている。

したがって棚橋の防災観とは「自然と共に生きる」ことを通じた地域理解であり、その実践の啓発の場として、特に郷土博物館論の支柱となっていることが明らかとなった。

(2) 東日本大震災被災地における地域住民の学習活動の展開

東日本大震災の被災地では、博物館のみならず、防災教育の拠点として大津波や地震の爪痕を実物資料として残す震災遺構が整備されてきている。そうした遺構を拠点に、地域住民が当時の事実を伝え、その反応を受けるといった語り部活動として行われている。

こうした語り部活動のなかには、「やまもと民話の会」のような被災前から社会教育活動として続けられてきた内容や方法を拡張する形で実施されているものや、住民の活動として新たに組織化が図られるものがあるが、いずれも、来場者との「語る - 聞く」といった対話を行うことが前提となる。

外からの支援者や被災経験や地域防災を学ぼうとする学習者に対し、被災経験者や被災地域住民が語り部活動を行うにあたっては、語り部自身が震災以前から自ら営んできた暮らしや文化、地形や歴史、また「現在」の復興や地域状況・課題について把握し、検証するプロセスがあった。いわば地域学習に基づくものであり、およびその意義が明らかにされた。また、地域の様々な学習団体との協働や再組織化が求められ、震災遺構や博物館はそうした活動のプラットフォームの機能を果たしていることが明らかになった。

(3) 厄災の継承から平和の文化創造への視点

コロナおよびそれに伴う研究期間の長期化から、研究の副産物として、地域社会や住民の暮らしの営みを時間軸で捉えていくことの意味を確認した。特に太平洋戦争により継承が途絶えた地域資源への着目したことで、こうした厄災の経験の風化、また消滅することへの危惧から、図書館・博物館等による公共的使命に基づく資料化のみならず、住民自身が地域を探究し、「語り継ぐ」ことの意義が浮かび上がった。それは事実の歴史的な掘り下げや生活様式・文化の再確認、記録化を通じた継承といった、住民自身による地域学習というべきものであり、そうした学習内容や方法論、支援についての検討が必要であることが浮かび上がった。また震災に対する防災教育のみならず、戦争や厄災、貧困、差別をも視野に入れながら「平和の文化」を創造・実現する暮らしや地域社会への学習として捉えていくことの視点を得た。

本研究において、「自然と共に生きる」棚橋源太郎の防災観を踏まえて検討により、特に震災後に防災教育を目的として保存・活用されるために整備されてきた震災遺構や文化的ハブとしての機能が求められる博物館は、地域住民による語り部活動の支援や来館者との対話の場の提供を通じて、地域学習を深化する機能が求められた。

こうした地域学習は、震災以前からの自然や地形、暮らしや文化をも統合的に捉えようとしていた。このプロセスは学習者である地域住民の当事者意識を育むとともに、継承や持続可能な地域づくりの資源となる。地域学習の深化は、博物館研究や社会教育学研究のみならず、民俗学、社会学、都市計画などにも結び付くと、今後の検討課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 生島美和	4. 巻 1
2. 論文標題 来町者の受入れを通じた住民の地域学習のひろがり	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 地域の暮らしと学び	6. 最初と最後の頁 69-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生島 美和	4. 巻 19
2. 論文標題 平和の文化を築く学習と公民館研究の展望	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本公民館学会年報	6. 最初と最後の頁 6~12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24661/kominkan.19.1.1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 生島美和	4. 巻 11
2. 論文標題 震災経験を通じた語り部活動における 語り - 聴く 学びのダイナミズム	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 茗溪社会教育研究	6. 最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 生島美和
2. 発表標題 博物館法改正議論を契機とした博物館・社会教育施設研究の展望 - 法制過程における登録制度の出現・関係法との調整の再考を通じて -
3. 学会等名 日本社会教育学会第68回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 生島美和
2. 発表標題 棚橋源太郎の博物館論による防災観の考察 - 二度の被災経験を参考にして -
3. 学会等名 日本社会教育学会第66回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 生島美和	4. 発行年 2019年
2. 出版社 弘前学院大学文学部 生島美和研究室	5. 総ページ数 161
3. 書名 青い目の人形と青森	

1. 著者名 手打明敏、上田孝典	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 社会教育・生涯学習	

1. 著者名 荻野亮吾、丹間康仁	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大学教育出版	5. 総ページ数 218
3. 書名 地域教育経営論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------